

---

**研究ノート**

---

# イスラーム神学にみる原子論的存在論から 現代量子力学へ

塩尻 和子\*

## はじめに

イスラーム神学の原子論的存在論は、どの学派の立場であれ、神の全能性と世界の無からの創造を証明するために体系化された議論であり、科学的な世界観を説明するものではない。しかし古代ギリシア哲学の影響を受けて展開した近世ヨーロッパ哲学を経て発展した近代科学では、認識論ではなく実験に基づく経験論の立場から、現代の量子力学へと発展している点が、興味深い。しかし、現代の量子力学の展開過程にはギリシア哲学からイスラーム神学を受けつがれて発展した原子論の存在があるという事実は、今日に至るまで取り上げられることが、ほとんどない。

本研究ノートは、古代ギリシア哲学における原子論の展開と、その影響下に発生したイスラーム神学の原子論的存在論との比較検討を目指すための予備的な試案から出発する。これらの原子論の議論を検証することによって、ヨーロッパにおける原子論の発展史へのつながりを検討し、イスラーム神学の原子論がどの程度まで現代の量子力学の展開に寄与したのか、その失われた絆について考察する契機としたい。

## 1. 『物の本質について』の発見

1417年にドイツの古い修道院で、古書収集家のポッジョ・ブラッチョリーニによって共和政ローマ期に活躍したルクレティウスの著作『物の本質について』の写本が発見された<sup>(1)</sup>。このラテン語で記された書物にはエピクロス<sup>(2)</sup>の唯物論的宇宙論や奔放な無神論が詩の形式で解説されていて、ルネサンス期の学者に大きな影響を与えた。

ルクレティウスの著作『物の本質について』が発見されたことを契機にして、15世紀以降のヨーロッパでは、古代ギリシア哲学の影響を受けて、「アトミズム」とよばれる原子論が発達していた。この原子論については、議論の一部がキリスト教の教義に反する思想であるとして、ジョルダーノ・ブルーノのように異端だと断罪されて焚刑に処せられる思想家も出てきた<sup>(2)</sup>。

これらの事例は、アッバース朝のカリフ、マアムーン（在位 813-833）が古代ギリシアの学問的写本を収集し、そのほとんどすべてをアラビア語に翻訳することを命じてバグダードに「知恵の館」を建設した歴史に続く事柄である。カリフの命令によって、当時まで保存

---

\* 筑波大学名誉教授

されていたほとんどすべてのギリシア語文献がバグダートの「知恵の館」に集められ、キリスト教徒、ユダヤ教徒、サービア教徒、イスラーム教徒たちの共同作業によって、ギリシア語からアラビア語に翻訳された。これらの翻訳事業によって、イスラーム政権は廃れていたギリシア科学を蘇えらせることができ、その後 1,000 年近くもの間、世界で最も優れた文明がイスラーム世界を中心に展開したのである。

このイスラーム文明の中で、古代ギリシア科学のほとんどすべての書籍が、一旦、アラビア語に翻訳されて研究されたことと、それを学んで新たにイスラーム哲学の研究書がアラビア語で著作されたことが注目される。この事実によって、その二種類のアラビア語書籍がイベリア半島の諸都市で、特に翻訳学校が建設されたトレドで、キリスト教徒やユダヤ教徒、イスラーム教徒たちの努力によってラテン語に再翻訳されたという事実は忘れてはならない<sup>(3)</sup>。

しかし、古代ギリシア哲学を受け継ぎ発展したイスラーム神学の「原子論」が、ヨーロッパでどのように受け入れられ学ばれてきたのか、詳細なことはなにもわかっていない。明らかにされていることは、ヨーロッパの人文主義者たちが理解できたのは、アラビア語に翻訳される前のギリシア語文献ではなく、アラビア語に翻訳されたギリシア語文献をラテン語に再翻訳した書籍であった。

ルクレティウスの著作『物の本質について』がヨーロッパの人文学者たちに大きな影響を与えたのは、それ以前に彼らの間でラテン語に翻訳されたギリシア哲学とイスラーム神学の原子論が多少とも学ばれていたからではないであろうか。

ヨーロッパの原子論は、15 世紀のニコラウス・クザヌスから 16 世紀のジョルダノ・ブルーノなどを通じて発展していき、17 世紀からはガッサンディ、ジョン・ロック、ライプニッツ、ヒューム、カント、マルクス、ニーチェ、ハイデガーと、次々に学者を生み出していくことになり、ついに今日では理論物理学で学ばれ、量子力学の「素粒子論」へとつながったのである<sup>(4)</sup>。

このような連続とした思想の道筋として、古代ギリシア思想の原子論を今日の世界へと伝える重要な引継ぎの役割を果たしたのは、まさにイスラーム文明であったことは無視されてしまった。

## 2. 西洋の原子論との繋がり

話を元に戻して、なぜイスラーム神学の中に原子論が導入されたのか、どこから受け継いだのか、などを考察しよう。繰り返しになるが、アッバース朝初期のイスラーム世界で、半ば廃れていたギリシア科学がイスラーム世界へ導入され、アラビア語に翻訳されるということになった事態の直接の要因は、529 年にキリスト教を国教とするビザンツ帝国の皇帝ユスティニアヌスが多神教時代の研究機関であるアカデメイアを閉鎖したことによる<sup>(5)</sup>。

多神教の下で発展したギリシアの文化遺産は、一神教のキリスト教を国教とするビザンツ帝国にはふさわしくないとして、プラトンが創設した研究機関アカデメイアが閉鎖され、ほとんど全てのギリシア語文献が廃棄され、学者たちが追放されたことによって、この原子論的存在論も歴史の表舞台から、一旦は姿を消した。これによってビザンツを追われた多く

の学者たちは、ハッラーンやジュンディシャープールなどの西アジアの寒村にギリシア語の文献を運び込み、ひそかに哲学書や科学書、医学書などを研究し、多くの写本をシリア語に翻訳していた<sup>6)</sup>。

繰り返しになるが、幸いなことにイスラーム時代に入ると、アッバース朝第7代カリフ、マアムーンがバグダードに「知恵の館」を建設し、密かに保護されていた古代ギリシアの学問的写本を収集して、その全てをアラビア語に翻訳することを命じた。そこで半ば廃れていたギリシア科学のほぼ全容がアラビア語で蘇ったのである。

その後、イベリア半島に進出した後ウマイヤ朝の勢力によって、トレドは、11世紀以降、イスラーム文化の西方での拠点としての機能を担い、アラビア語文献がラテン語に翻訳され、中世ヨーロッパの文化に大きな影響を与えた。トレドにもたらされたアラビア語文献は、バグダードの「知恵の館」において古代ギリシア語文献がアラビア語に翻訳された、まさにその翻訳書籍であった。12・13世紀のイベリア半島では、トレドがイスラーム文化の西方での拠点としての機能を担い、カスティーリア王国のもとでこの地に翻訳学校が設立された。そこでは、かつてギリシア科学の文献をアラビア語に翻訳したものが、新たにラテン語に翻訳され、中世ヨーロッパの文化に大きな影響を与えた<sup>7)</sup>。

つまり、レウキッポスからデモクリトスとエピクロスへとつながるギリシアの原子論をヨーロッパへ伝える役割を果たしたのは、イスラーム文明であったといえることができる。

ヨーロッパの原子論では事物の最小単位である原子、アトムは物質的な存在に適用されたために「機械論的原子論」とも呼ばれた。原子論には否定的でありながら、すべての現象は粒子の相互作用から説明できるとするルネ・デカルトによる機械論的存在論は力学的法則を形成した客観的存在論として説得力があり、各界に大きな影響を与えたことはよく知られている。

もともと今日では、原子論は哲学ではなく自然科学や物理学の分野で扱われている。ここでは、もはやアトムやモナド<sup>8)</sup>が事物や魂の分割不可能な最小単位として考えられるのではなく、原子には、さらに小さい内部構造が幾重にも存在することが証明されるようになり、物質の構造の中には、そもそも大きさを持たないものによって成立しているものもあることなど、哲学的存在論からははるかに離れたところで、大掛かりな実験をもとにした理論物理学の研究が進んでいる。

このようにして紆余曲折を経ながらも15世紀から絶えることなく研究され続けてきたヨーロッパの原子論が、古代ギリシアの原子論を直接受け継いで発展させたものだという特徴を持つとされることには、大きな問題が横たわる。ルクレティウスの『物の本質について』が大きなインパクトを与えたことは事実であるとしても、それだけでヨーロッパ全域に原子論の議論が巻き起こるほどの衝撃を与えたのであろうか。そもそもギリシア哲学がヨーロッパに伝播したのは、イスラーム文明を経てのことであるが、この経緯はヨーロッパ側からは語られることがない<sup>9)</sup>。

### 3. アシュアリーーの原子論

そこで、今後の比較検討の入り口として、本論ではイスラームの原子論の特徴を簡単に検

討しておこう。

スンナ派の思想のなかでも「原子論的存在論」は、一般にアシュアリー (Abū al-Ḥasan ‘Alī bn Ismā‘īl al-Ash‘arī, 873/4–935/6)<sup>(10)</sup>に由来するといわれているが、アシュアリー自身はスンナ派思想の創始者だとされる割には、独自の明確な思想体系を持っていないように見える。アシュアリー自身の著作のなかには、この原子論の議論ははっきりした形をみせていない。しかもアシュアリーはイスラームの正統的神学派の祖となった人物であるが、その生涯について詳しいことは不明である。彼の思想はのちにガザーリーに引き継がれて、正統的神学としての地位を確保したが、それまでにはかなりの紆余曲折があったようである。

アシュアリーは生涯に 55 冊の著書を著したといわれるが、アシュアリーの著書として現存するものは 7 冊にすぎず、彼の著作として確実に残されているものは、わずか 2 冊である。ガザーリーのような自伝を残していないために不明な点がおおい<sup>(11)</sup>。

アシュアリーを祖とするアシュアリー学派の思想が多数派のスンナ派神学が成立する基盤となったことは明らかであるが、アシュアリー学派は簡単に世間の承認をえたわけではないようである。生前の彼は、古巣のムウタズィラ学派<sup>(12)</sup>からも、厳格な伝統主義を標榜するハンバル派の法学者たちからも非難されている。彼の死後、11 世紀の後半になるまで、およそ 150 年ものあいだ、アシュアリー学派が歴史の表舞台に登場することはなかったと思われる。セルジューク朝の宰相ニザーム・アル・ムルク (1018-92) によって各地にニザーミーヤ院が建設され、バグダードの学院でガザーリー (1058-1111) がアシュアリー学派の神学とシャーフィイー派の法学を教授したことによって、初めて正統的神学と承認されるための劇的な展開をみたと考えられる。

アシュアリー学派は、イスラームにおける頑迷な伝統主義を排除するとともに、理性主義的な合理主義 (代表はムウタズィラ学派) によって抽象的な議論に耽ることを避け、その中間をおこなったといわれている。これはアシュアリーが神の属性に関して、二つの「中道」を採ったとされることから理解される。第一として、彼は、素朴な神人同型説的な信条を排除するとともに、ムウタズィラ学派による抽象的な比喩的解釈をも排除した。第二として、それと同時にムウタズィラ学派の比喩的解釈の方法論を用いて、神人同型説に陥らないように工夫を凝らした。

ムウタズィラ学派に対抗するアシュアリーの立場はおおむね以下のようにまとめられる<sup>(13)</sup>。

- ① 神は知識、能力、視覚、聴覚、言語、などのような永遠なる属性をもっており、それによって知り、行い、見、聞き、話すことができるものである。ムウタズィラ学派が言うように、それらの属性が神の本質であるということではない。
- ② クルアーンに記されている「神の手」「神の顔」「神の玉座」などの表現は、ムウタズィラ学派が言うように「神の恩恵」とか「神の慈愛」「神の権威」などと解釈することはできない。しかし、伝統主義者の主張するように、具体的な身体や物質として表現されているとも考えてはならない。それらも神の属性であるが、その在り方は被造物には知らされていない。
- ③ 永遠なる存在としては神以外にはないという「神の唯一性」を主張するためにムウタズィラ学派が主張する「創造されたクルアーン」説<sup>(14)</sup>に反対して、クルアーンは神の永遠

なる言葉であり、創造されたものではないと主張する。しかし、頑迷な伝統主義者が主張するように、現存する書物としてのクルアーンまで永遠なる存在であるとは考えない。

- ④ 人間の目で実際に見えるものは、物体でしかないとして、神の姿は人間には見るができないとするムウタズィラ学派の主張に対して、来世では信徒は実際に神の姿を見ることができるが、それがどのような様式や方法によるものかは、知りえないという。
- ⑤ 人間の行為は人間自らが自由意志によって選択することができるとし、人間に行為の責任を課すムウタズィラ学派に対して、アシュアリーは神の全能を強調し、この世のすべては神の意思によってのみ生じるとする伝統主義者の宿命論的思想を排除するために、神による行為の創造と人間による行為の獲得という理論（獲得説、カスブ論）<sup>(15)</sup>を打ち立てた。

#### 4. 原子論——神の創造を理論化

「創造を始められ、それを繰り返し、天と地からあなた方を扶養するのは、だれか。」（クルアーン 27 章 64 節）

クルアーンの記述によれば、神はその昔、無から天地自然を創造し、その後も引き続き創造しており、いまなお存在物を創造し続けているといわれている。イスラーム神学、カラームで議論される存在論は、神が宇宙の創造主であることを、いいかえると神の「無からの創造」と継続する「不断の創造」を、理論化し証明することが第一の目標であった。

カラームの存在論は基本的に原子論に基づいているために、神が一瞬ごとに世界を新しく創造していると結論づけたスンナ派の原子論的宇宙論は、しばしばイスラーム神学思想カラームの特徴的な一面であるとみなされてきた。一般にスンナ派の原子論はアシュアリーによって創始されたといわれているが、実際に誰が創始者であり、誰がカラームのなかに採用したのか、どのようにしてスンナ派思想のなかで展開していったのかなどについては、いまなお不明である。

創始者といわれるアシュアリーにしても、原子論に関する明確な論述を彼の著作のなかに見つけることは困難である。アシュアリーの立場は、彼と彼が以前所属していたムウタズィラ学派との関係を検証するとともに、彼の弟子の著述や彼以降のアシュアリー学派の思想的系譜をたどることによって、間接的に彼が主張した原子論の構造を検討するしか方法はない。しかし、この方法によって、アシュアリー自身の原子論と、その後のカラームにおける展開を、ある程度までは把握することができると思われる。

スンナ派の原子論は創造主としての神を証明するものとして、極めてイスラーム的な発想であるといわれることが多いが、その起源はムウタズィラ学派の原子論に求められる。もちろん、ムウタズィラ学派の原子論そのものは、新プラトン主義の影響を受けて成立したものであるが、本稿ではイスラーム内部の関連性を見ることにするので、新プラトン主義との関係には触れない。

アシュアリーには伝統主義者と合理主義者との二つの側面があるといわれるが、彼の宇

宙論には、むしろ合理主義的な側面が強い。言い換えるとアシュアリーの宇宙論は彼の師ジュッバーイー (?-915)<sup>(16)</sup>の説をそのまま受け継いだものであるが、それはアブー・フザイル (752?-840)<sup>(17)</sup>に始まるムウタズィラ学派の原子論である。つまりアシュアリーの原子論は彼が以前所属していたムウタズィラ学派の理論を伝統主義の立場に応用した最も明白な例であるということができよう。

アシュアリーは著作のなかで自らの原子論について明解な議論を提示しているわけではないことは前述した。1例をあげる。

われわれの原則では、物体には有限性があり、原子 (juz) は〔これ以上は〕分割できない。至高なる神は次のように言っている、「あらゆる事物は、われが明らかに例示して、数え上げている。」(Q.36/12) 無限なるものを数えることは不可能であり、一個のものを分割することは、〔無限に〕二つのものを必然とすることになるので、これも不可能である。(Risalah, §16)

アシュアリー派に属するシャフラスターニーの『諸宗教諸分派集』<sup>(18)</sup>にも簡単に次のように述べられている。

アシュアリーの原則では、生成された能力には事物の生成に対して影響力はない。生成の方途 (jihah) は唯一の決定 (qaḍīyah) であり、原子 (jawhar) や偶有 ('araḍ) に応じて変化するものではない。もしも、〔生成された能力が〕生成の決定に影響するとすれば、あらゆる被造物の生成に影響し、さまざまな色や味や臭いを調整し、さらに原子や偶有の生成にまで介入するであろう。ついには、生成された能力が天を大地のうえに建てることができるようになるであろう。(Milal, 1, p.97)

これらの記述から考えられることは、アシュアリーの原子論が宇宙や世界のあり方を説明するというものではなく、神の全能性と万物の無からの創造を聖典の教示にしたがって、体系化してみせることにあった。この点については、ムウタズィラ学派の思想も異なるものではない。

したがって、アシュアリーの原子論の枠組みは、ムウタズィラ学派初期の学者アブー・フザイルによるところが大きい。アブー・フザイルは、全宇宙は基体 (jawhar < jawāhir) と、それに付随する偶有 ('araḍ) から成る物体によって構成されると主張している。基体とは、一般にイスラーム神学では、物質的、物的なものとして理解されるが、アブー・フザイルによれば、物体のもっとも小さい構成要素として、原子 (juz) とも表現される。これを受けてアシュアリーによれば、物体とは「基体 (原子) の集合体である」となる (M.211, 14)。

物体にはそれぞれ、相互に異なる特質があるが、基体そのものは均質であり、性質をもたない。物体が特質を実現するためには、特定の要因が必要であるが、この要因は非物質的なものであると考えられる。この要因をアブー・フザイルは偶有 ('araḍ) と呼んだが、この名称は以後、引き継がれていく。

基体・原子が均質的であるという原則は、同じくムウタズィラ学派の学者ジュッバーイー

によって主張されているが (Maq.308), アブー・フザイルから引き継がれた立場であると考えられる。この立場はアシュアリーにも当然のように受け継がれており, 物体を構成する最小単位である原子はすべて同一の種類であり, 互いに相違する特質は, 原子に付随する偶有のなかに存するとする。基体が基体であるかぎり, 同一の種類でしかなく, それぞれの偶有によってのみ異なることができる。

存在物のあらゆる特性は外から与えられるが, 原子を創造するのは神であり, 原子に偶有を与えるのも神である。存在物に存在を付与するのは創造主以外にはない。原子は偶有の基体である。「原子は存在するとき, 偶有を運ぶもの (ḥāmil) である」 (Maq.307)。したがって, 「原子は存在物となるためには, 偶有を伴って (muḥtamil al-'araḍ) いなければならぬ。」また, 存在するためには, 「場を占める」 (mutaḥayyiz, taḥayyiz) ことが要請される。「場を占める」という考えは, ジュッバーイーにも, スンナ派のジュワイニーにもみられるが, アシュアリーは「位置する」 (kā'in) の用語を用いる。

原子は偶有の基体となるだけではなく, 原子そのものも偶有がなければ存在しえない。言い換えると偶有は存在を開始する要因でもある。この考えは学者間で微妙な相違がみられるものの, ほぼ全員一致の支持をえている。

アシュアリーは, 神があらゆる物体を瞬間ごとに創造しなおしているという説を採用している。神によって創造された原子が存続するのは, 神が存続性の偶有を瞬間ごとに創造しているからである。したがって, 事物がなめらかに存続しているように見えるのは, 神によって創造される「存続する」という偶有の存在によってのみ, 存在することができる。

われわれの目には存続しているように見える事物も, その原子は瞬間ごとに再生されており, 「持続」の偶有によって存続しているにすぎず, その「持続」の偶有でさえも神が瞬間ごとに造り替えているために, 事物が存続しているように見えるだけである。このアシュアリーの「創造し続ける」という図式に従えば, 事物が存在しなくなる, つまり消滅することとは, 神が原子に「永続性」の偶有を創造するのを止めたことを意味する。アシュアリーの言葉によれば, 「神があるものを消滅させた」ということになる。

## 5. 偶有の原則

事物が存在することは, 神の創造によるものであるが, 神が創造する原子は, 最初は「非存在」であり, 神がこの非存在の原子に「存在」という偶有を創造して付与することによって, はじめて原子は存在するものとなる。原子の創造の瞬間に偶有も創造され, 事物は時間, 空間, 方向性をもったものとなる。運動も創造された偶有である。

原子はすべて均質であり, 性質を持たないものであるが, 存在物の特性は偶有によって付与される。言い換えると偶有が存在物の特質として実現されるためには, 原子という基体が不可欠となる。事物は, また連続性をもつことがあるが, それは「存続する」という特質をもった偶有の一群によって存続する。ひとつの偶有には連続性はないが, 「存続する」偶有が無数に生じるなら, その事物は存続することになる。

イブン・フーラクの『アシュアリー言説集要約』 (Muḡarrad maqālāt al-Ash'arī) には, 偶有の一般法則として8つの法則が挙げられている<sup>(19)</sup>。

- 第1法則：すべての偶有は存在するために内在する場を必要とする。  
 第2法則：すべての偶有は、それがどのようなものであれ、反対の性質の偶有がそこにはないという条件下でのみ、いかなる原子のなかにも存在することができる。  
 第3法則：ひとつの偶有は同時に二つの原子のなかに存在できない。  
 第4法則：すべての偶有には、反対の性質の偶有がある。  
 第5法則：たがいに似たふたつの偶有は、同じ基体に内在することはできない。  
 第6法則：いかなる偶有も存続しない。  
 第7法則：すべての偶有は感知されうる。  
 第8法則：偶有にふさわしい特質が適用されるのは、それを運ぶ原子においてである。

これらの法則のうちで、注意すべき点は、ひとつの偶有は同時にふたつの原子に付着することはできないが、複数の偶有がひとつの原子につくことはできる、という点である。アシュアリーによれば原子も偶有も一時的なものにすぎず、それらはただ一瞬しか存在することができない。この点が、彼が師のジュッバーイーと決別した理由の一部であると思われる。ジュッバーイーは、原子のなかのあるものは、偶有を伴わなくても永続することができることを主張していたからであるが、しかし、『イスラーム教徒の言説集』を検討すると、ムウタズィラ学派のほとんどの学者も、偶有が安定したものではなくうつろいやすいものであることを認めている<sup>(20)</sup>。

#### おわりに 原子論から素粒子論へ

アシュアリーが原子論を採用したのは、神を天地の創造主として神の創造行為を説明するためであるということは明白であるが、この点は、ムウタズィラ学派でも同様である。とくにアブー・フザイルにおいては、原子も偶有も神が創造したものという立場を取っている(Maq.314-5)。この意味ではイスラーム神学カラムは、古代ギリシアの原子論のように世界と事物の本性を発見しようとするものではなく、創造の真理を体系化し、被造物としての事物の構造や真相を理解しようとしたものである。

文献から読み解くと、アシュアリーの立場は非常に単純であり、すべての存在物は存在する限りにおいて、感知されうる。存在するものは、見られ、聞かれる。特定の環境下では、神も、存在するものである限り、天国での見神論に繋がる議論にみられるように、見られ聞かれるものであることにはかわりはない。

そもそも原子論では、原子が存在の第一原理である。正確に言えば原子は物体を分割してえられる部分ではなく、まず原子の存在があって、その集合体が物体となるということである。部分があって、はじめて集合体としての事物が存在するのであり、集合体よりも固体が優先されることに繋がる。この立場はイスラームの人間観や靈魂論と結びついて、「創造不断」といった独特の世界観を形成していくことに繋がる<sup>(21)</sup>。

イスラーム神学の原子論的宇宙論は、ムウタズィラ学派であれ、アシュアリー学派であれ、神の全能性と世界の無からの創造を証明するために体系化された議論であるが、どの学者

の見解でも、原子こそが事物の存在において第一の原理であることが理解される。そこでは原子は事物の究極的な分割によってえられるたんなる「最少部分」ではなく、存在物の集合体を構成する必然不可欠の最少部分なのである。いいかえれば、事物の構成を開始するのは原子である。存在世界において原子を優勢とみる立場は、個を集合体より上位におくということの意味する。

イスラームの原子論的存在論は「創造不断」という独自の思想を生み出しているが、それは近世の機械論的世界観だけでなく、現代では動植物の細胞の循環法則にも当てはまるという意外性も持ち、量子力学の基本的な考えと共通するものがみられる<sup>(22)</sup>。

古代ギリシア哲学においては、レウキッポスとデモクリトスが原子論の創始者であるといわれる。しかし彼らの著作はすべて失われており、後代のアリストテレスやシンプリキオスなどの哲学者による引用や反論などによって判断する以外に、彼らの学説を把握することはできない。レウキッポスはBC480年頃に活躍したと推定される。デモクリトス(BC460-370)はソクラテスとほぼ同時代に活躍したとされ、原子論をレウキッポスから学んだという説もあるが、倫理学の分野でも業績を残している。

デモクリトスを受け継ぎ、原子論の中心的思想である「アトム」の定義を完成させたのはエピクロス(BC341-270)である。彼は原子論の中心的定義を「これ以上分割不可分な原子とそれが運動する空間である空虚から世界は構成されている」とした。実際にはエピクロスはデモクリトスから継承したとみられるが、エピクロス自身は思想遍歴を重ねた結果、独学したと主張している<sup>(23)</sup>。

一方のイスラーム神学においては世界観だけでなく、独自の人間学、倫理学、霊魂論、社会論、政治思想などを産み出すもとになり、偶因論の原理となったのである。よって原子論的世界観がイスラームの人間観や社会観の基盤となっていることは否めない。

他方、ヨーロッパでは機械論的世界観を主張する研究者によって、17世紀以降の原子論の多くは物質的世界のみを研究対象として発展するようになった。さらに19世紀にはいると、原子論は重要な科学的成果をあげるようになってきた。こうして「原子論」は、肉眼では見ることでできない自然現象を明らかにする学問として量子力学発達の契機ともなった。古典的な原子論はイスラーム宗教思想を学ぶうえでの、重要な鍵概念となるものであると同時に、2000年近い年月を経て生き延びて、今日では、自然科学や理論物理学の中で「ヒッグス粒子」研究などを含む「素粒子論」にかかわる貴重なテーマへとつながったと考えられる。

今日の原子論には人間の思惟による研究ではなく、巨大な粒子加速器を駆使して、新たに極小の素粒子を発見しようとする、終着点のない激しい競争が展開されている。それでも、哲学的宗教的な原子論は、世界と人間との関係性を考える上で重要な鍵概念を与えてくれる。

## 註

- (1) ポッジョ・ブラッチョリーニについては、スティーヴン・グリーンブラット(河野純治訳)『一四一七年、その一冊がすべてを変えた』(柏書房、2012年)に詳細に説明さ

れている。

- (2) ジョルダン・ブルーノ (1548-1600) の生涯については、ブルーノ (清水純一訳) 『無限、宇宙および諸世界について』 (岩波文庫, 青 660-1, 1995 年) を参照されたい。ドミニコ会の修道士であったブルーノは、地球の自転説を支持し、地球も太陽も宇宙の 1 つの星にすぎないなどと主張して、強固に自説を曲げず、異端審問の末に焚刑にされた。1979 年になって、カトリック教会は死刑判決を撤回し、彼の名誉を回復した。
- (3) イスラーム文明の全容とそのヨーロッパ文明における影響については、塩尻和子『イスラーム文明とは何か—現代科学技術と文化の礎—』 (明石書店, 2021 年) で分かりやすく説明した。特にイスラーム世界にギリシアの遺産が導入された過程については 33-37 頁, トレドに関しては 57-60 頁を参照されたい。
- (4) 古代的な謎解きのような思惟かと思われている「原子論」が今日の理論物理学で学ばれる量子力学の「素粒子論」へと繋がっているということは、不思議な話である。しかし、物質を構成する最小単位は何かという、人類のあくなき疑念が、今日では、世界の物理学者が新発見を競う量子力学へと展開している。田上孝一・本郷朝香編『原子論の可能性—近現代哲学における古代的思惟の反響—』, 第 11 章「素粒子と米粒の自己同一性」 311-331 頁を参照。
- (5) イスラーム文明とギリシア哲学との関連については塩尻 (2021), 第 2 章「ギリシア科学の受容」 33-37 頁, 及び第 3 章「ギリシア文明の継承と発展」 39-51 頁を参照のこと。
- (6) ビザンツ帝国を追われた学者たちは、ハッラーン (トルコ西南部) やジュンディーシャープール (イラン西部) などの寒村に貴重な書籍を運び込み、秘かに研究を続け、またギリシア語文献をシリア語に翻訳するなどの活動を行っていた。塩尻 (2021), 第 2 章 33-34 頁。
- (7) 塩尻 (2021), 第 4 章, 第 7~9 章に, テーマ・学問ごとに説明した。
- (8) デカルトなどの影響をうけて 17 世紀半ばから 18 世紀にかけて活躍したライプニッツは晩年に、物質的な原子とは区別される霊的精神的な最小単位をモナド (monad) と設定して、モナドロジーという存在論を形成した。モナドは西洋哲学における原子論の一つの形態であると考えられるが、興味深いことに、神の世界創造に関してはイスラーム神学カラムの原子論とよく似た立場がみられる。ライプニッツ (2019) 『モナドロジー』。
- (9) 今日に至るまで、ヨーロッパ文明はギリシアから直接受け継いだものだと主張し、イスラーム文明の存在と影響を否定する学者が、わが国にも多い。塩尻 (2021), 18, 162, 172-4 頁。
- (10) アシュアリーの生涯とその思想については塩尻和子「イスラーム神学にみる原子論的宇宙論—アシュアリーからジュワイニーまで—」 (『宗教哲学研究』No.22, 京都宗教哲学学会, 2005 年, 12-32 頁), 塩尻和子『イスラームの人間観・世界観』 (筑波大学出版会, 2008 年), 183-186 頁を参照されたい。
- (11) 確実にアシュアリーの著書とみられる主要なもの 3 冊だけを簡単に説明する。『宗教

原理の解説』(*al-Ibānah ‘an uṣūl al-diyānah*) は素朴な伝統主義に貫かれている著作であり、製作年月日は不明であるが、彼の伝統回帰の直後に書かれたものと見ることができる。アシュアリー著書と言うにはあまりにも伝統主義的であり、これを偽書とみるむきもある。『神学要綱 誤謬と異端の徒への返答』(*Kitāb al-luma’ fī al-radd ‘alā ahl al-zaigh wa-l-bida’*) はアシュアリーの基本的な立場を解説したものであり、彼の神学思想が簡潔に述べられている。しかし、写本のせい、語彙の定義があいまいな部分が多い。『イスラーム教徒の言説集』(*Maqālāt al-Islāmīyīn*) は晩年にバグダードで書かれたとされるが、彼の時代までのイスラーム各派の主張や見解を、予断を加えることなく、客観的に丁寧に採集したものである。学派別とテーマ別とにわけて編集してあるために、各学派の見解が一纏まりになっていない面もあるが、当時の思想界の状況を知るためには、第一級の貴重な資料である。

- (12) ムウタズィラ学派 (*al-Mu‘tazilah*) は、イスラーム史上最初の体系的な神学を形成した神学派で、8世紀前半にバスラで発生し、イスラーム思想史上最初の体系的な思想運動を起した。9世紀初頭から10世紀にかけてイスラーム世界に大きな影響を与えた。アッバース朝初期の827-48年に、「クルアーン創造説」(「神の言葉」は神とともに永遠なるものではなく、神が創造したとする説) が時のカリフの支持を得て、いわゆる御用学派となり、833年には異端審問ミフナを引き起した。その後は周辺地域に分散して少数派となったが、その思想の一部は今日までシーア派の神学に受継がれている。またアッバース朝下のユダヤ教徒に大きな影響を与え、ラビ・ユダヤ教神学の形成に貢献した。

理性的推論を基盤にした緻密で理論的な神学体系を形成した最初の神学派であるが、あまりにも抽象的な神解釈は一般庶民からの反発を呼び、アシュアリー学派を中心とするスンナ派多数派から激しい反駁を受けた。しかし、極端な宿命論を否定し、人間の自由と責任を論じた彼らの宗教倫理思想は近年でも高く評価されている。塩尻和子『イスラームの倫理 アブド・アル・ジャッバール研究』未来社、2001年。

- (13) アシュアリーとムウタズィラ学派の相違点は、特に神に実現されるにふさわしいすべての性質である「神の属性」について論争が激化した。塩尻 (2008), 59-117, 208-220 頁を参照のこと。
- (14) ムウタズィラ学派の独特な主張で、アッバース朝初期の827-48年、「神の唯一性」の主張を確実にするために、「神の言葉」であるクルアーンについて、神とともにクルアーンが永遠であるとすれば、「永遠なるもの」が複数、存在することになるとして、「神の言葉」は神とともに永遠なるものではなく、神が創造したとする説「クルアーン創造説」を主張し、これが時のカリフの支持を得て御用学説となったが、アシュアリーはこれに激しく反対して、反ムウタズィラ学派運動を展開した。
- (15) カスブ論とは、アシュアリー学派独自の倫理思想の中で用いられた用語であるが、原子論的存在論につながっている。この世界で生きる人間に倫理的義務があるとしても、神が作り出す行為と事物を、人間が神から与えられた能力に応じて獲得(カスブ)するだけであり、その獲得という行為によって、人間は道徳的な善悪の判断をされる、というものである。こうして、アシュアリー学派では、神の全能性を守りながら、人

間の自由意思に基づく倫理思想を形成したとされるが、どちらにしても神の全能性が優先される議論であり、一般には普及しなかった。塩尻 (2008), 72-73 頁。

- (16) アブー・フザイル (751-849) は初期ムウタズィラ学派の学者で、後に続く哲学的な神観念を作り上げた。新プラトン主義, 当時のアリストテレス主義, 古典後期の自然科学などから影響を受けたと伝えられるが、彼の著作は断片しか残っておらず、まだ十分に研究されていない。塩尻 (2008), 146-148 頁。
- (17) シャフラスターニー (1086-1153) はイランのホラーサーン北部で生まれたアシュアリー派神学者で、分派学者でもあった。主著『諸宗教諸分派集』(*Milal wa-l-nihal*) にはイスラームの諸分派だけでなく、ユダヤ教, キリスト教, マニ教, サービア教徒のそれぞれの分派も含めて、当時中東地域一帯に展開していた宗教について、客観的な視点から記述しており、中世期のイスラーム世界の宗教を知るための第一級の資料となっている。
- (18) ジュッバーイー (849-915) はムウタズィラ学派のバスラ派を代表する学者。息子のアブー・ハーシム・アル・ジュッバーイー (861-933) とともに理性を重視する学説を体系化した。当初はアシュアリーも彼に師事していたが、袂を分かったのちも、アシュアリーの学説にはジュッバーイーの影響が残っている。息子のアブー・ハーシムとともに文法学にも優れていたといわれている。父子ともに著作は完全な形では残っていないが、彼の見解は同時期の多くの学者たちに引用されていて、ある程度までは構築できる。
- (19) M.pp.202-215. 塩尻 (2008), 190-191 頁。
- (20) 偶有の存続について、以下の見解もみられる。「彼 (アブー・フザイル) は次のように主張している。存続は神の『存続せよ』(ibqah) という命令による。同じ命令は物体の存続や存続すべきあらゆる偶有の存続にむけてもなされる、と」。Maq.p.359.
- (21) クルアーンには神による絶え間ない創造の繰り返しについて、前述の章句のほかにもいくつかの記述がみられる (一〇/四, 二九/一九)。クルアーンでは、神の創造行為はすべてが一挙になされるのではなく、事物が「非存在」の状態から存在の状態に変化する瞬間に繰り返されると伝えている。この繰り返しされる創造は「不断の創造」と呼ばれることになるが、この原語は直訳すれば「新しい創造」(al-khalq al-jadīd) である。いいかえれば、神が一瞬ごとに世界をまったく新しく作り替えているという意味を示している。アシュアリーが採用した「不断の創造」はそののち、パーキラーニーの原子論に受け継がれて、スンナ派の偶因論の基盤を形成していくことになる。塩尻 (2008), 183, 192-193 頁。
- (22) 田上・本郷 (2018), 第一章「古代原子論」3-4 頁。
- (23) A. A. ロング (2003) 『ヘレニズム哲学』「第二章エピクロスとエピクロス哲学」23-29 頁。

#### 凡例

- M: Ibn Fūrak, *Muğarrad maqālāt al-Ash‘arī* (ed., Daniel Gimaret, Beyrouth, 1087)
- Maq: al-Ash‘arī, *Maqālāt al-Islāmīyīn* (2<sup>nd</sup> Edition, ed., Hellmut Ritter, Wiesbaden,

1963)

Milal 1: al-Shahrastānī, *al-Milal wa-l-niḥal* (vol.1, Cairo, 1976)

Risalah: al-Ash‘arī, *Risālah fī istiḥsān al-khawḍ fī ‘ilm al-kalām*, in *The Theology of al-Ash‘arī* (ed., Richard MacCarthy, Beyrouth, 1953) , pp.119-134.

#### 主な資料

al-Ash‘arī, *Kitāb al-ibāna*, ed., Bashīr ‘Uyūn, Damas, 1981.

al-Ash‘arī, *al-Kitāb al-luma‘*, in *The Theology of al-Ash‘arī*, pp.5-116.

al-Ghazālī, *al-Iqtisād fī al-‘itiqād*, ed., Muḥammad Abū al-Qilā, Cairo, 1972.

#### 主な参考文献

Alnoor Dhanani, *The Physical Theory of Kalam*, Leiden, 1994.

Richard Frank, *Al-Ghazālī and the Ash‘arite School*, Durham, London, 1994.

———, *The Metaphysics of Created Being According to Abū L-Hudhayl Al-‘Allāf: a philosophical study of the earliest kalām*, Istanbul, 1966.

Luis Gardet, *Dieu et la destine de l’homme*, Paris, 1967.

Daniel Gimaret, *La doctrine d’al-Ash‘arī*, Paris, 1990.

———, *Théories de l’acte humain en théologie Musulmane*, Paris, 1980.

Richard Mccarthy, *The theology of al-Ash‘arī*, Beirouth, 1953.

Stanford Encyclopedia of Philosophy,

*Arabic and Islamic Natural Philosophy and Natural Science*, 2006, 2018.

*Atomism from the 17<sup>th</sup> to the 20<sup>th</sup> Century*, 2006, 2014.

‘Abdurrahmān Badawī, *La Transmission de la Philosophie Grecque au Monde Arabe*, J. Vrin, Paris, 1968.

‘Abd Raḥmān Badawī, *Afrūṭīn ‘inda al-‘Arab*, al-Ṭab‘at al-thālithah, Kuwait, 1977.

W. Montgomery Watt, *The Influence of Islam on Medieval Europe*, Edinburgh University Press, 1972.

Frederick C. Copleston, *A History of Medieval Philosophy*, University of Notre Dame Press, Reprint 1990, Originally 1972.

John Marenbon, *Later Medieval Philosophy (1150-1350)*, Routledge, 1987.

Ed. Charles E. Butterworth and Blake Andrée Kessel, *The Introduction of Arabic Philosophy into Europe*, E. J. Brill, 1994.

Michael Frassetto and David R. Blanks, *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe*, St. Martin’s Press, New York, 1999.

Dimitri Gutas, *Greek Philosophers in the Arabic Tradition*, Ashgate, 2000.

板倉聖宣『原子論の歴史』仮説社，2004年。

塩尻和子『イスラームの倫理—アブドゥル・ジャッバール研究—』未来社，2001年

- 「イスラーム神学にみる原子論的宇宙論—アシュリーからジュワイニーまで—」,  
『宗教哲学研究』No.22, 京都宗教哲学会, 2005年, 17-32頁。
- 『イスラームの人間観・世界観』筑波大学出版会, 2008年。
- 『イスラーム文明とは何か—現代科学技術と文化の礎—』明石書店, 2021年。
- スティーヴン・グリーンブラット(河野純治訳)『一四一七年, その一冊がすべてを変えた』  
柏書房, 2012年。
- 田上孝一・本郷朝香編『原子論の可能性』法政大学出版会, 2018年。
- 西川亮『古代ギリシアの原子論』溪水社, 1995年。
- 八巻和彦『クザーヌスの世界像』創文社, 2001年。
- ジョルダノ・ブルーノ(清水純一訳)『無限, 宇宙および諸世界について』岩波文庫, 1982  
年。
- ライプニッツ(谷川多佳子・岡部英男訳)『モナドロジー』岩波文庫, 2019年。
- A. A. ロング(金山弥平訳)『ヘレニズムの哲学』京都大学学術出版会, 2003年。